

ジュンナル石窟レーニアードリー第6窟について

関西大学 豊山 亜希

レーニアードリー石窟は、インド西部マハーラーシュトラ州に位置する、6支群150窟余から成るジュンナル石窟の1支群である。ジュンナル石窟全体に10窟あるチャイティア窟(祠堂窟)は、全て未完や損壊などの問題を抱えるが、レーニアードリー第6窟は、保存状態が最も良好である。列柱式の馬蹄型プラン、ヴォールト天井、入口前面のヴェランダ、方形板と壺型モチーフの柱頭に動物の丸彫り彫刻を載せる柱、といった様式的特徴は従来より、ジュンナル石窟南西約70kmのカールレー石窟第8窟、ジュンナル石窟北方約90kmのナーシク石窟第10窟との類似が指摘されてきた。寄進銘の字体も同時期の特徴を示し、この見解を補強する。先行研究は、銘文の刻出年代を基に石窟の造営年代を推定して様式的変遷を辿ることを主眼点としてきたが、銘文の記述内容に目を向けて石窟造営の社会的背景を探り、そこから様式展開の要因と意味を考察するには至っていない。この観点において、インド最大規模の石窟群であるジュンナル石窟は、前期仏教窟の造営期(紀元前2～紀元後3世紀)のほぼ全般を通して開鑿され、窟数と銘文数が豊富であることから、紀元前後のインド社会を知る上で貴重な資料である。本発表では、その中からレーニアードリー第6窟を取り上げ、銘文と造形的要素の双方から、前期仏教窟の造営の背景にある社会状況と建築様式の展開を明らかにしたい。

レーニアードリー第6窟との関連が指摘されるカールレー第8窟及びナーシク第10窟銘文は、クシャハラータ朝という勢力に言及する。クシャハラータ朝は、紀元後1世紀後半に土着起源でデカン一帯を支配していたサータヴァーハナ朝に拮抗した、外来起源の王朝である。レーニアードリー第6窟銘文は、西方系商人の造営援助を記録するのみで、この王朝に関して一切記録しない。ジュンナル石窟の全銘文中、ビマー・シャンカル支群の一例のみがこの王朝に言及し、その字体はレーニアードリー第6窟銘文と同時期に属する。クシャハラータ朝銘は西インドの全石窟中ジュンナル、カールレー、ナーシクの3箇所においてのみ確認されることから、レーニアードリー第6窟は外来起源の支配勢力下で造営された可能性が高い。その内部列柱柱頭には西方起源のモチーフである人頭獣像が表される。同様のモチーフは、インドの石窟では外来勢力及び外国商人の寄進銘においてのみ表され、レーニアードリー第6窟と同時期には、カールレー第8窟とナーシク第10窟のみで確認される。

本発表の結論を述べると、レーニアードリー第6窟の西方系商人の寄進銘は、紀元後1世紀後半にジュンナル、カールレー、ナーシクが外来勢力の支配を受け、外国の商業資本が、西デカン内陸部の交易上の要衝であったこれら3地域に流入したことを示している。人頭獣モチーフをはじめとする様式的特徴は、紀元後1世紀後半の西デカンの社会状況を明確に映し出している。